

## 旅と先生 ― 福翁戯伝拾遺

前坊 洋

ここに先生と称するのは福沢諭吉、旅と湯治と家族団欒をこのんだ先生の四十歳代以後を、再版『福沢諭吉全集』と『福沢諭吉書簡集』と新聞記事と回想とによって再構成してみようとかんがえる。『近代日本研究』二四、二五巻所載の小稿をあわせて御覧ねがえればありがたい。なお、文中パーレンにおさめた註記、漢字とアラビア数字のみのものは『全集』の巻次とページ、四桁のアラビア数字は『書簡集』の書翰番号。おなじく、「伝」によって石河幹明『福沢諭吉伝』の巻次とページ、「直話」によって高橋義雄編『福沢先生を語る』のページをしめすこととする。

明治九年五月二十七日、『ジャパン・ガゼット』の船客欄に先生のなまえが「フクガワとこどもふたり」としてあらわれた。この日、先生は一太郎、捨次郎の二子とともに横浜からネヴァダ号上海行きで神戸へむかったのだ。

『自伝』に「船賃は上等にて十円か十五円」(七208)とあるとおり、先生とこどもたちはキャビンにいた。『ジャパン・ウィークリー・メール』二十七日号によれば、キャビンの日本人は十八人、それに対して日本人三等船客は九百四十三人だった。もっとも、『ガゼット』をみると、前者は十五人と推定され、後者は八百十一人となっている。

この旅中の日附を有する文章で現在のこざれているものは、五月三十一日の夜に慶応二年三月入門の武藤吉次郎作の

地図に序したもののみ、それには「大坂西横堀の旅宿に於て」（一九七六）となっていて、先生はこの日、あるいは明治二十五年の春とおなじ宿にとまったのではないかとおもわれるが、それはともかく、七月にしろされた「福沢諭吉子女之伝」の一節が旅の輪郭を髣髴させてくれる。「明治三年諭吉大病の後は、大低<sup>マイ</sup>毎年一度づ、旅行、或は熱海箱根の温泉、或は日光山等、諸処見物すれども、下女下男を連れ、或は親戚朋友と共にし、家族団欒たる旅行にして、恰も家に居るに異ならず。子供の心に旅の感を為したることなし。依て明治九年五月諭吉と一太郎捨次郎三人にて無僕、且同行の朋友をも態と求めずして、銘々に着替の風呂舗包を携へ、飛脚船に乗て神戸に着、明石に行き、大坂より堺、奈良に廻り、京都より大津に行き又神戸に返て、船に乗り帰宅せり。往来凡二週日、此度は真の旅行したるが如し」（別131）。

要するに、先生は自身の旅行の「限界」をよくわきまえていて、教育的見地からこの旅を発案したのだ。こどもたちそれぞれに「着替の風呂舗包」などもたせながらキャビンの客となったところも先生らしいが、右の一節を「但兄弟兩人のため益する所あるや否、知る可らざるなり」（別131）とつきはなしてむすんだところも、まことに先生ならではの感がある。

『自伝』が「父子三人従者も何もなしに」（七208）と回想しているのは、先生にとってもこの体験が鮮烈だったことをしめしているが、そこから、まえに引いた「船賃は」へとつづく部分、「横浜から三菱会社の郵便船に乗り」（七208）という箇所は、先生の記憶力の程度をものがたって過不足がない。『ウィークリー・メール』の出船の欄に、ネヴァダ号は American steamer, Williams, for Shanghai and Ports, Mails and General, despatched by M. B. M. S. S. Co. となつて、最後の社名は、五月二十六日の『ガゼット』の広告によると、三菱メール・スチーム・シップ会社なのだ。

『自伝』は、関西の見物をおえてまた神戸から「三菱の船」（七208）を利用した、と書いているが、記憶ちがいであれば、これは『ウィークリー・メール』六月十七日号で六月十一日、十三日の『ガゼット』では六月十三日に横浜へ

はいったとされている千里丸<sup>ちり</sup>だろう。おなじ『ウィークリー・メール』と十五日の『ガゼット』に十四日着港の隅田丸もでているが、先生は十四日に横瀬文彦宛の手紙を書いているから、同日横浜では少々無理がある。ちなみに、前年十月二十五日の『郵便報知新聞』によると、船賃は上等二十円、下等六円、往復三十六円、荷物ひとつにつき三元だった。

明治十六年十月二十一日、日本鉄道会社の熊谷、本庄間が開業した。新聞広告によると、当初十六日開業の予定だったがものが荒川出水のために延期になったのだ。

北川礼弼が先生からきいた話としてつたえるところでは、先生が岩倉具視に熱心にといた結果、この日本最初の鉄道会社が誕生したのだという(伝四<sup>762</sup>)。『日本国有鉄道百年史』によると、その設立は明治十四年十一月十一日、第一区線東京、前橋間は翌年の六月一日に川口以北から着工され、また、東京起点を上野として上野、川口間も十月下旬に着工のはこびとなった。そして、上野、熊谷間の完工は明治十六年七月二十六日、熊谷以北は同年五月着工、上野、高崎間の全通は明治十七年五月一日、さらに、前橋までの全通は八月二十日だった。

上野、本庄間八十二キロあまりの開通後まもなく、先生はそれを利用して熊谷へいった。十二月十一日附一・捨宛の手紙に「一昨九日上野汽車へ初て乗り、熊谷へ参候。実は本庄まで参候積之処、熊谷之富豪連が、序ながらとて招待」(808)とある。旅客列車は一日三往復に増便されたが、上野の駅舎が煉瓦づくり二百三十七坪の正式のものとなるのは明治十八年七月十六日のことだから、当時はまだ仮の駅舎で、荷物取扱所がそれにあてられていた。乗降場も枕木をつみかさねただけのもので、先生はこの駅舎をみて、「虚飾を捨て実益を専一としたるは至極私立会社の主趣に適へりと称せられぬ」(交詢雑誌一四19)と同行五人のうちの岡本貞然が書いている。

十二月十一日の『時事新報』によると、上野発は七時。岡本は熊谷着を九時だったというけれど、『官報』十月十三

日掲載の時刻表ではこの一番列車の鴻巣発が八時五十四分だから、到着時刻はいますこしおそかったかもしれない。それでも、明治十一年四月二十一日に熊谷学校でひらかれた演説会によられた藤田茂吉が三日後の『郵便報知新聞』に報告したところでは、「払曉東京を發し午後三時を以て同駅に達するを得たり」というのだから、便利になったものだ。もっとも、藤田のときは雨あがりで、「道路の悪しきを如何せん」という事情もあったのだが。

熊谷で、土地の名士の出むかえにしたがって熊谷寺で昼食の響応にあづかり、四百三十人あまりの「談話会」参加者を前に演説、四時二十七分の列車で帰京したと、これも岡本のつたえるところだ。『時事』では「此日寺堂に会する者凡三百名」となっているが、いづれにしても、「序ながらとて招待」したにしてはできすぎている。

復路は、『官報』によれば四時二十一分発で、上野着が六時五十五分ということになる。「必此の表示の時刻に違はざるやうには請合ひがたけれ共、可成丈遅滞なきやう取行ふべし」とあるから、若干のおくれがあったのだろう。そこに「吸煙車の外は煙草を謝絶す」とあるのもおもしろいが、『時事』と先生の手紙とがともに上りの発車時刻を四時二十分としているのも鷹揚なものだ。

先生の演説の主旨は、もっぱらその経済効果の可能性に力点をおいたものだった。「熊谷地方は今回其市邑の全面を挙げて東京負郭の地に移転したるものなれば、京城近在の人民をして独り従前の利を専にするを許さずして可なり。電気蒸気の効力も亦大なるものと云ふ可し」(一九〇〇)。実際、『百年史』によると、明治十六年八月十三日から、熊谷近辺の荷主の需要をみたすために生糸輸送が旅客列車への貨車連結というかたちではじめられている。貨物輸送の開始だった。十二月十三日の『東京日日新聞』には、「通常列車の度に二輛づゝの荷車を増加せらるゝ由なり」という記事がみえる。そして、利根川舟運への對抗措置として上りの貨物運賃がわりびかれることになった結果、本庄駅開業後の貨物収入は旅客によるその約三割にまで達することとなった。

手紙には、「鉄道会社より別段之チケットを呉れて、往復無賃。是は鉄道之友なる此方へ、聊か敬礼を表するの意

ならん」とある。『官報』の運賃表にしたがえば、上野、熊谷の片道は、「特別」二円、「上等」一円二十銭、「下等」六十銭だったから、「鉄道の友」としての先生にはたぶん四円分の「敬礼」がなされたことになる。『百年史』によれば、明治十五年七月十五日、荘田平五郎が日本鉄道会社理事委員に就任しているから、あるいはその配慮にでたものかもしれない。

明治十九年三月二十一日、三月十日出発の第一回漫遊の途次、伊賀上野から奈良への途中、先生は月ヶ瀬香雲亭井深久三郎方において昼食をとった。

このとき先生がひとりの村びとにこのあたりは何町を一里とするかとたづねると、村びとは三十六町と応じた。ところが、一町は何間かとたみこむとこたえがかえらない。そばであそんでいたこどもがこともなく一町は六十間と返答したので、先生は何がしかの金を「洋服の懐中ポケットより」つかみだしてそのこどもにあたえた。東海道をくだる途中たびたび五十町一里の換算に難渋したため、この土地はどんなものかところみたのだった。はからずも「小児の即答」によって教育普及の一斑がうかがわれる、と先生によるこびようはひととおりではなかった。四月一日の『伊勢新聞』の記事だ。

御褒美の「幾許の金」がどれほどのものだったかさだかではないし、ここは旅中として、金以外に適当なものもおもいたらなかつたのかもしれないけれど、ともかく、先生は人に金をあたえることにいきさかの抵抗も感じないたちだった。

犬養毅の回想に、十四年政変後、犬養と尾崎行雄が『朝野新聞』ではたらいっていたころ、先生によばれていってみると、政治に首をつっこんだふたりの「妻子眷属に少し金を遣らうと云つて、兩人に金を呉たことがあ」（直話だ）ったという。尾崎の回想では、明治十六、七年ころ、尾崎が借金して家族がこまっているとき、先生から使いがやってきて、

家族のためにと「年の暮などに五十円位贈られたことがあります」（直話50）となっている。

岡部保の回想に、明治二十年二月に岡部が北里柴三郎の養生園に入園したとき、先生はその費用を負担したばかりでなく、退園後にも海浜保養のためにと五十円をあたえたところ（伝四707）。ちなみに、木村芥舟の「福沢先生を憶ふ」にも、明治二十六年の夏に木村が赤十字病院にはいったとき、諸費用を先生が支払ったといっている（六591）。

石河幹明によると、明治三十二年七月に慶応義塾から米独両国へ留学生が派遣されることになったとき、先生の招宴でおくられた饞別は百円づつだった（伝四727）。

晩年の先生にとっては、人に金をあたえることは趣味と化していた。趣味は、利害関係のない見ず知らずの人間を対象とするときもっとも純粹になるようにみえた。しかしながら、そういうたぐいの人間に金をあたえるためにはそれなりの努力が必要で、石河によれば、先生は散歩の途中乞食に邂逅したときの用意にいつも「木綿の袋に小銀貨を入れて」（伝四268）もちあてていた。北川礼弼の回想を参照すると、それはしかられていることでもあったときのためでもあったようだ（伝四790）。そして、北川によると、先生は毎朝新聞をよんで「憐れな話や気の毒な話」（伝四800）に注意をおこたらず、その主人公のところへ車夫に金をもたせたのだという。

尾崎の回想に、先生は「口には常に「いはれなく他人に金銭をやるものは馬鹿だ」といつて」（伝四687）いたというのがあるし、今泉みねの回想にも、「乞食にむやみに物をやってはいけません」（東洋文庫九33）という先生の説教があったが、尾崎が「ソレでも口には常に」とつづけているように、実際のところ、先生は「いはれなく」、「むやみに」ほどこしをしたようにみえる。

波多野央の回想には、先生が緒方洪庵の妻をたづねてその病床にあることにおどろき、退去のとき百円を布団の下にいれ、世話をしている人にあとを托してかえったことがあったが、洪庵の妻は「をり／＼私に対してこんなことをされるのですが、私はよく福沢さんの心持を知てるから快く其志を受けます」（伝一151）とかたつたとみえている。

この反応は金をうけとるがわの抵抗感をしめしてもいるけれど、こういう機微に理解をとどかせる能力を先生がもちあわせなかったわけではないということを知るためには、明治七年三月二十日附小田部武宛の手紙、母の状態がかんばしくないので長姉小田部礼そのほかに上京をいそぐようにすすめたそれの、送金を知らせる一段(0162)をおもいおこしてみればよい。

明治十九年五月七日午後六時、先生は茨城地方漫遊から帰京し、以後漫遊をやめた。折角一念発起した、石河幹明のいう「風俗視察を目的とする旅行」(伝三508)も、結局わづか二回で中止となったのだ。石河はその理由として、「旅行は却つて多忙の種となる」ことと「到るところ歓迎招待に忙はしく、本来の目的」が実現しにくいことの二点をあげている(伝三507)。まえの方について、『時事新報』の社説を「年譜」によってながめてみると、この五日間の旅行中先生は律儀に二篇を三日にわたって発表したけれど、旅行の前後の社説が欠けているから、そこへしわよせがいったのかもかもしれない。あとの方の歓迎せめは今回も相当のもので、『時事』に連載された渡辺治の「茨城紀行」によると、宴席だけでも四、五、六と三日連続、先生はそれぞれで演説をしている。五日の偕楽園内好文亭では、「幸ひ丹下原の牧場に二頭の犢牛あり屠りて以て先生を饗すべし」(時事515)という茨城日報社長の、子牛にとっては「幸ひ」といいかねる思いつきがあり、六日の土浦日新楼では、町田則文の回想によれば、「生粋の田舎料理で其辺の鶏でも締めて食はせてもらった方が、よほど有難い」(伝三506)という先生の希望で、「土浦第一等の料理屋」の料理はやめにして、あわててそれを買いたつてたべるさわざになった。

けれど、この旅行にも漫遊のおもむきがまったくなかったわけではなく、たとえば、四日には西山をたづねて、「虚飾」ぎらいの先生は、義公の山荘の「疎末と申さんか質素と称せんか」(時事513)といったありさまに感ずるところがあった。

ついでながら、石河の回想にある義公顔まけのエピソードを紹介しておこう。石河が先生と一緒に小田原の大雄山へいったとき、「道者に化けて宿坊に泊つて見よう」という先生の発案を実行にうつしたのだが、小僧があまりうるさいので、先生はとうとう「そんなに面倒なら東京三田の福沢諭吉といつてしまへ」（伝三三三）。証拠に何をだしたかさだかでないけれど、がらりと待遇が変わったという。

茨城から帰京後、十二日附一宛の手紙に、「拙者は本月三日東京立、上野之汽車にて小山駅まで参り、夫より人力車に乗り、即日水戸へ着、同処三泊。帰路は土浦に廻り一泊、七日夕帰宅致し候。春來度々旅行、健康之為には頗る妙なるが如し。帰宅之翌日は即五月八日、順光院様十三回忌、中上川朝吹之家族を招き、石亀師を招待して読経之供養致し候」（1056）。『日本国有鉄道百年史』によれば、利根川橋梁完成はこの年の六月十七日だから、渡辺の随行記にもあるように、一行は「車を下りて川を渡り再び又車に乗るの人数あるが為め彼是れ四十分時間を費」（時事512）さなければならなかった。笠間、水戸は馬車、水戸、土浦、松戸は人力車、松戸、東京はまた馬車だった。前回の漫遊からかえって一ヶ月もたたないうち、上野、小山直通を目前にひかえてそれをまたずに出発し、これは予期しないことだったが、かえりの人力車区間は雨中の泥濘をはしりぬけ、母の年忌に間にあわせるといふ日程を、「健康の為には頗る妙なるが如し」といつてみせる芸当は、先生の健康を十分に証拠だてているだろう。

先生は多忙をいとわなかったし、にぎやかなことも好きだったし、「風俗視察」もそこそこできたようだから、漫遊の中止はやはり先生のヤメグセによるとかんがえるのがよさそうだ。事実、その後も先生は家族旅行をくりかえし、おなじように多忙をきわめ、おなじように歓迎せぬにあい、そして、旅先での見聞を『時事』の社説にいかしている。ただし、この明治十九年の漫遊を、先生自身、何回、いつまでつづけると宣言してはじめてわけではないのだけれど。

明治二十二年四月二十九日、先生は山口仙之助に手紙を書いて、箱根見物にでかける米国人母子の世話をたのんだ。山口はいわゆる岩倉使節団とおなじ船で米国にわたって苦勞のすえ、牧畜に着目して七頭の種牛とともに帰国、しかしながら、時期尚早と判断してそれを駒場勸業寮に売却のうえ明治七年十月慶応義塾にはいり、さらに、先生のすすめによって学問よりも実業界に投ずることをえらび、箱根宮之下の藤屋旅館を買収して明治十一年に富士屋ホテルを開業したのだ、と『富士屋ホテル八十年史』にある。

明治二十三年六月二十三日、先生は宮之下奈良屋で昼食をとった。前日の夕刻、家をあげて湯本福住へやってきたばかりだった(1507)。

明治二十六年五月九日ころ、先生は箱根にあそび、山口のところへちよつとたちよつた。十四日附神津国助宛の手紙によると、山口は「神津バタ之義、頻りに賞賛致居候」(1769)という。

同年八月十三日、先生は奈良屋にとまることにした。この日の午後奈良屋から桃介にあてた手紙と木村芥舟の「福沢先生を憶ふ」とを勘案すると、先生一家と病後の木村、それにその妻も一緒に、拠点は湯本福住だったようだ。手紙の方に、宮之下は「塔ノ沢ノ沢よりも少しは涼しきやうに有之、兎に角に夜分かやは不要之よしなり」(1785)とつたえている。とりたてていうほどのこともない箱根湯治の記録だけれど、『富士屋ホテル八十年史』にでている、山口と奈良屋旅館主安藤兵治とのあいだに締結された宿泊営業についての契約、ならびに、その背景を一瞥するとき、先生の立場は微妙なのだ。

すなわち、富士屋ホテルは奈良屋の外国人客をうばうことによって創業史を開拓していったため、双方のあいだにはげしい競争が展開され、痛みわけのかたちで明治二十六年五月、前者は外国人客専門、後者は邦人客専門とし、かつ、前者から後者へ毎年一定の報酬金を支払うことが約されたのだ。それ以前から山口の方針で邦人客を謝絶していた富士屋ホテルに先生がとまったことがあるかどうかはわからないが、先生はすくなくとも、地理的にも文字どおり対立する

紛争当事者の双方と平等に接触し、しかも和解への労は一切とらなかったというわけだ。

『自伝』の「王政維新」の項にある、「私の処には官軍方の人も颯々と来れば、賊軍の人も颯々と出入りして居て、私は官でも賊でも一切構はぬ、何方に向つても依怙臆んなしに扱つて居たから、双方共に朋友でした(七二〇)」という話は、「朋友」をめぐる意味論的ところみをあきらめらるならば、おそらくウソではないだろう。

明治二十二年九月二十五日、先生はこどもたちが奈良大仏殿の柱の穴をくぐりぬけるのをながめていた。「道中日記」に「三八、大四、愛作と太郎さんも柱の穴をくぐりて引ツカ、りもせず、万蔵も首尾能くぬけたるは平生正直なるが故ならん(一九一〇)」とある。「愛作」は里の長男、「太郎さん」は十二月九日附小田部礼、服部鐘宛の手紙によると、中上川彦次郎の長男太郎一(一四二〇)。「万蔵」は高仲万蔵、明治三十一年八月十日『時事新報』の「狂犬」という雑報記事に先生が「雇人高中万蔵(廿二)」と書いているから、このときは十三歳くらい。ちなみに、明治二十二年九月七日附捨宛の手紙に「同勢は凡十六人の内、子供はお光以下四人なり(一四〇)」とあって、明治十二年三月二十七日生まれの光より下が先生の範疇では「子供」ということになる。

十六日に横浜から船にのって翌日神戸着、帰京は陸路で翌月の五日になったから、ちょうど旅のなかばだった。「道中日記」には「家内十二人の外に下女下男同道凡二十名(一九一〇)」となっているが、「道中日記」、九月七日附の手紙の右に引用した部分、それに『大阪毎日新聞』九月十九日の「神戸出入船客」欄を勘案すると、東京からの同行者はつぎのとおりになる。

錦、一太郎、勝、里、中村愛作、房、俊、瀧、光、三八、大四郎。中沢周蔵、高仲万蔵、シウ、ソノ、ナカ、ハナ。

「子供」との関連でいえば、光の上は瀧で明治九年三月二日生まれ。結婚して間もない一太郎と勝、それに次男壮吉

を産んで間もない里が参加しているのが目につくが、先生をいれると「家内十二人」とはなっても、「凡二十名」の方はおぼつかない。十二月九日附長姉、末姉宛の手紙によると、太郎一だけではなくその祖母宛、それに捨も神戸から京都まで行をともしにしているから、これを数にくわえたのかもしれない。「神戸出入船客」にみえる時事新報社の菊池武徳、日本郵船の秋葉静は、おそらく先生の旅行とは無関係だろう。

先生ですら「凡二十名」なのだから、新聞のつたえる人数に異同があるのはやむをえないけれど、一行をむかえた各紙は一樣にそのサイズの大きさに注目した。

旅寓は難波橋北詰奥野方を悉皆借切る都合（『大阪毎日新聞』九月二十日）。

家族一同（十九人）相携へて昨日神戸より来阪（『大阪朝日新聞』九月二十一日）。

予て若松町浜の奥野かつ方に宿し居たる福沢氏の一行二十人（『大阪朝日』九月二十六日）。

令息一太郎、捨次郎の両氏を始め十七名の家族を率ひ一昨日午後七時奈良より来京（『中外電報』九月二十七日）。

家族廿余名と、もに一昨日午前八時三十五分発の汽車に乗り大津へ（『日出新聞』十月三日）。

先生の家族十三名随行者四名都合十七名の一行は昨日午後一時四十五分の汽車にて京都より来着（『金城新報』十月三日）。

家族七人を従がへ名古屋地方より帰京の途一昨夜当市紺屋町の大東館へ一泊（『静岡大務新聞』十月六日）。

しかしながら、先生の「賑やか好き」はこのときにはじまったわけではない。明治七年三月、母を奉じての塔ノ沢行きは二十日附小田部武宛の手紙によると「同勢三十人斗」。「子供も孫も打揃ひ賑やかに道中致候」（0162）というのは母の立場からの話だが、「賑やか」ぶりの企画者と判定者とは先生だし、明治十三年六月十七日附大江卓宛の手紙では、前日「拙宅にこもくめしを製し、大人を除き子供百名余集会」、すなわち、和田義郎の幼稚舎生をまねき「中々以て賑々敷」（0479）、明治十六年十二月二十二日附一・捨宛の手紙でも、「去る十八日には餅つき。塾之童子、和田と本塾

とを合して百八十八名、宅之座敷に呼び、あんの餅を馳走致し、中々賑々敷事に有之候」(0828)。また、明治十八年四月十日附一宛によれば、「本月五日母人が主人にて、懇意之婦人而已六、七十名斗り招き、六四郎娯楽など呼び、賑々敷饗応致し候」(0851)ということもあつたし、絶好調だったのは明治二十年七月で、九日附のおなじく一宛に、「当月は宅に客を致し、二日は男子三十人斗り、五日には婦人三十余名、又二十二日にも、男子三十人斗案内致し置候。此方より呼べば先方にも呼ばれ」(1183)とみえているとおり、繁忙のかぎりだった。

明治二十五年五月二日、先生は大阪の宿、西横堀京町橋東詰奥野うた方にいた。家族七人、総員十人をひきつれて吉野から大阪にやってきたものの、ふりつづく雨のために山陽道にでることかなわず、「逗留を余儀なくされていたのだ。

同日附一宛の手紙で、先生は「西横堀之宿も最上に無之、実は当惑之次第」(1706)となげいたが、翌日の『大阪朝日新聞』も「斯く意外の家に投宿したるは客の来訪などの煩を避けんが為なりしが如しと聞く」と報じた。先生自身、右の手紙に、「此度之旅行は都て出没を曖昧にして、人に知らせざるやう致し候」といつているところよりすれば、あるいはあつたっていたかもしれない。

厳島神社、金刀比羅宮の参詣をすませて、京都へかえつたのは十日だった。同日附一宛によると、「明日にも天氣に相成候得ば、二日を費して伊勢参宮」(1709)のはずのところ、予定を変更して十二日、先生はふたたび大阪をおとづれた。十二日の『大阪朝日』によれば、十一日正午の大阪は曇天だったというから、早朝の京都は雨がのこつて伊勢行きはおもわしくなかったのだろうか。十二日の『中外電報』、『日出新聞』に、「本日は大坂に赴きて直ちに当地へ引返へし明日より三日許り伊勢地方を巡遊し再び来京する筈なり」とあるから、参宮には未練がのこつたようだ。

ともかく、先生は十日附の手紙に、「此度は大坂も神戸も素通りに致し、止宿所さへ不分明なるゆゑ、来訪者は少し。

至極安気に御座候」(1709) としたにもかかわらず、大阪へもどって、こんどは今橋の紫雲楼にはいった。五時から平野町堺卯楼さかいに京阪神の慶応義塾出身者らをまねいて宴をはるためだった。十四日の『大阪毎日新聞』に、先生が「一々来客に挨拶をなし」たこと、家族一同を「来客に紹介し」たこと、「来会者より当日の余興」のもうけがあったことなどがのっている。「一同観まを尽して退散せしは午後十一時過なりし」というから、もちろん京都へはかえらない。

「来会者は四十九名」、大阪からは小幡弥、本山彦一、緒方拙齋らの三十五名だった。明治二十二年秋の旅のおりにも、出発まえの九月七日附捨宛の手紙にみえる「人の応接用談に飽き／＼致候に付、半月か二十日計り一切知らぬ旅天に閑を偷」もうという「所謂ぬけ参り」(1709) の姿勢をつらぬきとおすことは困難で、本山その他の招待をうけておなじ堺卯楼におもむき、また、名古屋においても秋琴楼での饗応にあづかった。先生がおしのびの旅をしたいとかがえたのも本心ならば、旧知の人々にかこまれて演説のひとつもしてみたいという気もちも、先生の旅行には欠かせない彩りだった。

十五日の『大阪朝日』によると、十三日も紫雲楼どまりで、十四日「午前十時七分梅田発の汽車にて名古屋に向ふて出発せり」とある。十五日は名古屋どまりの予定というけれど、はたして無事だっただろうか。

明治二十六年二月二十日、先生は滞在中の大磯招仙閣で、その地の繁栄をもたらした初代陸軍軍医総監松本順に對する忘恩をいませめた一文をつづって「主人に示」(二〇384) した。それが手まわしよく三月一日発行の『医事新聞』第三九六号にのっている。

松本の自伝によると、松本が大磯に海水浴場をひらかせようとしたのは明治十七年のことで、十八年の夏には一応のかたちかとのったけれど翌年はコレラの流行があつて頓挫し、二十年に東海道線が国府津まで延長され、また、濤龍

館の落成があつて、ようやく「京浜よりの浴客多く、大いに雑踏を極め」（東洋文庫三八六〇）るようになったという。この自伝は明治三十五年に配布されたが、「富貴の人、地を購ひ別墅を営むもの、今なお漸々多く、地価ために騰貴し、旧時に百倍する所少なからず」（同 39）という趨勢は先生のころからのもので、夏冬ともに人気をあつめて、「海辺の各地に別荘を造る人も少なからず。随て地所の価も騰貴して」（二〇 383）いと先生も書いている。

「余は翁に面会したることはあれども深き交あるに非ず」（二〇 384）と先生のいう松本との関係をおさえておこう。松本は林董の兄で、林の長女菊は明治二十四年二月十日に捨と結婚しているから、ふたりは姻戚になる。林は旧名董三郎、慶応二年の幕府遣英留学生の一員となったが、そこには福沢英之助もいたから、おそらく先生はこのころから林を見知っていたにちがいない。

岡本貞休の回想に、山県有朋が先生「を文部省へ出仕させようと云ふので」（直話 194）松本を使いによこしたとあるが、松本の自伝によると、松本が山県を識つたのはその陸軍大輔のときだったという（81）から、明治五年二月二十八日から翌年四月十八日のあいだのことで、先生のところへ松本がやってきたのも、岡本は「今の山県元帥が、文部大輔<sup>ママ</sup>をして居た時」（直話 194）といっているけれど、たぶんこのころのことだろう。松本は弟と先生との関係をたよりにさしむけられたのかもしれない。先生の明治七年十月十二日附馬場辰猪宛の手紙の追って書きに「林氏帰国之節は、ブック御恵投被成下、難有奉存候」（0174）とある「林氏」も、『全集』の註記は、「岩倉大使一行に随行して欧米を巡遊した林董のことであらう」（一七 176）といて、『書簡集』のそれはそのように断定している。林の自伝によるとその帰国は前年五月だから（東洋文庫一七三 48）、すこし時間があきすぎているくらいでもないではないけれど。

こうみてくると、先生の松本頌徳の文章には多分に林を意識したところがあるようだが、松本自身にむけられたエールの面もみおとせない。岡本の回想は、「其頃先生の勢ひは、官吏などは犬のやうなものだと、戯言に言つた位であるから、山県でも何でも、用があるなら自分で来るが宜いぢやないか、そんなことを云つて来るのは、定めて田舎漢だら

う、男振りも詰らぬ奴だらう、相撲を取つても、そんな者に負けはせぬ、そんな者の下に附くやうな福沢ではないと、非常な気焰を吐いたさうである、処で松本良順が非常に怒つて、之れを山県大輔に報告した」（直話194-）とつづいてゐるのだ。先生の啖呵に「相撲」がでてくるのもおもしろいが、岡本によると、先生はこの山県、松本の工作の裏に蕃所調所出身で新政府に出仕した津田真道がいるとにらんで余計に力んだのだという（直話196）。

山県の命令にしろ、津田の「変節」にしろ、使者の松本には直接関係のないことなのだから、岡本の回想どおりとすれば、先生が松本のためにこのくらいのことを書きたくなるのも無理はない。あの小野友五郎ですら、明治二十二年五月四日の『時事新報』にのせた肥田浜五郎の墓誌のなかで、「文久元年小形汽船千代田形製造に付き、小野友五郎春山弁造の二氏は其船体を造り、君は蒸気機関を製し、開闢以來始て日本国自製の蒸気船を得たり」（一九〇三）と顕彰されてゐるのだから。

明治二十七年二月二十七日、先生は日本郵船の上海行西京丸で展墓のために横浜をたった。明治五年以来ひさかたぶりの帰郷だった。三月三日の『ジャパン・ウィークリー・メール』によれば、同行は一・捨、そして、「ミセス・ナカミガワ」とあるのは次姉中上川婉だろう。

新聞のつたえるところによると、翌日午後三時神戸着、海岸の西村へ投宿して、三月二日午前四時ふたたびおなじ船で出発、同夜馬関着、ただちに大分県へむかった。かえりは十三日午後馬関、やはり西京丸で十四日午前八時半神戸着、西村で休憩して、九時発の列車で名古屋へむかい富沢町の有隣亭に一泊、翌朝出発した。十六日附山口広江宛の手紙に「昨十五日夕東京着仕候」とあるが、そこに「中津出立、行橋に一泊」（1823）ともみえているから、中津をでたのは十二日だったようだ。結局中津には十日もいなかったのだけれど、「有志忘言亭に歓迎会を開く。会する者百余名あり

席上福沢氏の談話あり」と十五日の『大阪朝日新聞』がその要旨をのせている。

余は大阪に生れて五人の兄弟あり。而して諭吉は末子なり。三歳にして父を失ひ母に憑りて故園中津に帰り、齡二十に至りて長崎及大阪に遊び遂に今の東京に居を占むることとはなりぬ。凡人の觀念は十五六歳より二十五六歳の間は最も強固にして、此間に見聞習熟せる事は忘れんとして忘るべからざるものなり。故に余が中津に於る關係は殆んど他国同様なれども亦忘るべからざるものあり。今回の帰郷實に二十二年目に當る。中津の市街見るに足らずとは余の想像なりき。而して事實は全く想像と反し意外にも盛況を呈せり。独り士族の窮せるは愚者の結果として止を得ざれど、實業者は向後何を為すべきや、如何なる方向を取るべきや。余が利實に關係なき身を以てすれど所説或は違ふことなけん。曰く養蚕なる哉養蚕なる哉

だれでもおもいだすのは『自伝』冒頭の一節だろう。ところが、『自伝』は大坂がえりの先生一家が中津の生活になじまないまま周囲を「俗物」視して「高尚」の地位をたもつたと、いわばその「孤高」ぶりを強調しているのだ。全国ネットとローカルとのちがいだろうか。まえに引いた帰京翌日附の礼状に、「言語拳動ギス／＼不致して性情の優美愛すべ」き某を評して、「中津の人には珍らし」といつているけれど、先生自身は、「中津人は俗物である」といきがっている方が、「中津の人」の例外になるよりも、みづからの意識にのぼせたくない深淵をのぞきみることなくすませやすかったのかもしれない。

石河幹明は、先生が中津の姉ふたりとともに墓参をしたといっているが（伝三二二）、おそらく姉三人のすべてともまいったものだろう。先生にとって「家」は「忘るべからざる」中津への接近を媒介する有効な方法だったが、この帰省中、売りにだされていた耶馬溪競秀峯を風致保存の見地から買いとることにして、その周旋をたのんだ四月四日附曾木円治宛の手紙に「ケ様のものがあれば折々中津へ参る口実とも相成」（1839）と書いているのは、先生における中津の位置をよくしめしている。

明治二十八年四月二十日、先生は三女俊を広島においておくことをやめようとおもった。そして、なんとなく明治七年十月十二日附馬場辰猪宛の手紙をおもわせるような手紙を書いた。「先日こそ態々参りたる者が、間もなく直に引返すとは、何之事が訳ケが分らず。さればとてコレラは恐ろし。好しやお俊が独り難を避けたる処にて、君が依然字品に居るときは、避けて甲斐もなし。又人情に於て忍びざる所なり」(1941)。

「字品」は日本郵船会社長沼支店の所在地。「君」は手紙の受け手で同支店勤務、俊の夫の清岡邦之助。「コレラ」はこの手紙に「今日北里氏より申参候」とある情報によってその危険性が指摘された中国地方のコレラ。北里柴三郎は、俊に「差したる故障なくば勿々東京へ御帰り可然」とのかんがえだったという。そして、「先日こそ態々参りたる者」がその俊で、東京をたったのは三月十三日のことだった。ただし、「間もなく直に引返」させるについての先生の抵抗感は、この一ヶ月あまりの時間のみじかさや東京、広島間の距離の遠さばかり由来するのではなく、いまひとつの事情にもよっていた。

一月二十二日附清岡宛の手紙にしたがえば、清岡が香港行きのおくみをもって字品へ転動したまま、そこでのつとめが「已に半年に」もなったため、「お俊事、謂れもなく此方に居るは世間体も宜しからず」(1911)ということだったのだ。俊が清岡と結婚したのは明治二十六年十一月三十日、この手紙には追って書きがあって、「お俊が此方に居て世間体云々は、別に子才<sup>マユ</sup>あるにあらず。知人来訪之時、お俊さんは長々御留主、何故に広島へは御出なさらぬかと申者多く、訳けもなく留主をして居るは、何か事情のあることではないかと、不審を容るゝ者なしとも云ひ難し」と懸念が表明されている。前年八月二十一日附清岡宛の手紙によると、清岡が任地未定のまま東京をはなれたのは八月上旬のことだったようだ(1863)から、一月二十二日の時点で「已に半年に相成」(1911)というのはオーバーで、先生の焦燥

はこんなところにもあらわれていただろう。

「態々」を引きだした「世間体」を考慮すれば夫婦でかえるのが一番で、先生は四月二十日附の手紙の後段で、「コレなどの事は少しも言はずして、御帰京の辞柄は可有之哉に被存候」と会社向け演技の秘策を清岡にさづけているのだが、それはそれとして、三月十六日の『扶桑新聞』に「東京三田の福沢諭吉翁は西行の途次一昨夜笹島信忠支店に一泊せられし」と名古屋どまりのことがみえているように、「態々参りたる者」は俊ばかりではなかった。いま一度一月二十二日附にもどると、俊は「兎に角に急々差遣し度、其御地にて特に御差支も無之候はゞ、一人を附して送るなり、或は老生が養生かた／＼自から召連るゝなり、如何様にも可致」きものだったが、帰京後の三月三十日附飯田三治宛の手紙にあるとおり、「次第に老境に入り、折々旅行し養生致候心得」(1922)から、結局後者が選択されることとなったのだ。

三月十五日以後の日程を『扶桑』、『中国』など各紙によってみると、十五日夕刻汽車で神戸着、すぐのりかえて広島へ出発。十六、十七両日の行動はわからないが、十八日は午前九時ころから東練兵場の衛生隊演習を見学して、家族一同とともに午後一時宇品港にむかい長沼支店で休憩、散歩のち日本郵船の小蒸汽で遊覧。十九日午後七時三十二分、妻、むすめ、従者一名と広島から神戸着、旧門下、知友の出むかえをうけ、ただちに海岸西村へ投宿。二十日午前六時三ノ宮発の汽車で帰京の途についた。

なお、十九、二十日に関しては二十一日の『大阪朝日新聞』によったが、おなじ日の『大阪毎日新聞』では、二十日午前七時三十一分神戸着、西村で休息のち帰京の途につくとなつてゐる。前者に「夫人令嬢従者一名を随がへ」とあるから、ほかの「態々」連の存在が判明するのだけれど、この「令嬢」は俊以外のだけかで、すなわち、石河幹明のいうとおり、先生は東京からふたりのむすめをとまなつたことになるが(伝三三三)、このいまひとりがだれなのかよくわからない。明治二十八年七月二十七日附小田部武宛の手紙によれば、里の夫中村貞吉は「四ヶ年前より肺病にて」

(1963) 七月十七日に歿するし、明治二十七年十月二十六日附清岡宛の手紙によれば、房の夫桃介も「頗る軽症」(1886) といえ同病で入院中だったから、里、房ともにこの明治二十八年三月の旅行への同行は不可能だっただろう。瀧も前年六月に結婚したばかりだったし、五女光の可能性が一番たかいかもかもしれない。

この十九日は清国講和全権李鴻章の来日した日で、先生の広島旅行も全体としてほとんど話題にならなかったのだが、十八日の動静を報じた十九日の『中国』は「借問す、拜金宗の棟梁殿何物か奇利を見出せしや否や」と先生を歓迎した。十四日の『日出新聞』にも「此翁元來奇想に富む。惜哉、奇に走て誠を不解」という評がみえるけれど、これは十二日の『時事新報』社説についてのもので、旅行とは関係がない。

帰途、二十日はおそらく名古屋もしくは静岡あたりで一泊したものとおもわれるが、帰京日時もふくめて判然しない。ただ、二十三日附清岡宛東京発の手紙がのこされている(1921)から、帰京は二十一日か二十二日とかんがえてよいだろう。一週間ばかりして書いたのがまえに引いた飯田宛の手紙で、それは先生の「絹布の夜具」ぎらいをしめすものなのだが、その引用箇所のままには、「今度広島行にても途中宿屋にて何か騒々敷致し、先方は御馳走振り、此方に取りては面白くも何とも無之、例へばどんすのふとんなど担ぎ出して、美は則美なれども」とある。先生が「どんすのふとん」にどこで邂逅したものかわからないけれど、そして、もちろん一ヶ処ともかぎらないのだけれど、あるいは十四日の信忠だったかとおもわせるふしもある。それまでの先生の名古屋の宿は明治十九年四月が多波良、二十二年十月が秋琴楼で、明治二十四年二月十日の『金城新報』によるとその二月八日も秋琴楼、信忠にとまったのは明治二十五年四月二十五日だけだ。ところが、これは翌日附一宛の手紙に「名古屋富沢町信濃忠あきにて」(1703)とあるから「支店」の方ではないらしい。笹島の信忠にとって、はじめてむかえる「福沢の老翁」(1922)は、まだ「御馳走振り」たくなる客だっただろう。

帰京後、コレラの心配は二十三日附の手紙にすぐしるされるが、その後はおちついて、ふたたびあらわれるのがこの

項の最初にかかげた四月二十日附のものだ。あとはコレラ一辺倒で、結局五月十日附俊宛にあるように、「万事万端御兩人真実之決心にて御取極」(1943) というかたちをとらせて、五月二十三日附俊宛によると帰京するのは俊のみ、先生は「今夜九時之汽車にて」(1946) 万蔵をむかえにだすと書いている。清岡が舅の気もちを忖度したのだろう。なお、この五月二十三日附の俊に対する指示、「途中は神戸と浜松と二泊の積り」や「神戸の宿西村もあまり面白からず」は、もちろんついこのあいだの体験によったものにちがいないが、先生と俊とでは条件がことなるから、これで先生の浜松どまり、西村の「どんすのふとん」をおもうことは性急にすぎるといえる。

十月十三日附清岡宛によれば、俊が東京から広島へもどったのは十月下旬か十一月中のようで(1982)、これは五月二十二日附俊宛にみえる「秋になりて流行病之沙汰も薄らぐときは、おまへも直に御出可被成」(1945) という先生のころづもりにそったものだ。

明治二十九年四月二十三日、先生は伊勢の外宮、内宮にまいった。明治五年四月三日附九鬼隆義宛の神戸からの手紙に希望を述べて(0123) はたせず、明治二十二年九月七日附捨宛の手紙にも計画して(1405) はたせず、そして、明治二十五年五月二日の項にしろしたように、十日附一宛京都からの手紙にも予定を立ててはたせず、懸案のようやくの実現だった。

二十三日と二十五日の『扶桑新聞』によると、先生は家族十名とともに二十二日の終列車で宇治山田町に到着、油屋に宿をとった。二十三日は両宮の参拝をおえて二見ヶ浦にあそんだと二十五日の『扶桑』、二十八日の『伊勢新聞』は報じている。前者には「幣帛料を捧げ」たともみえるが、随行者のしるした会計報告にも、この日両宮にそれぞれ「お礼並にお守」として「金十二銭」をついやしたことになっている(二一176) から、新聞の記事は事実がちがいない。

ところが、二十三日附小幡篤次郎宛の手紙には、日程のおくれを理由として二十六日の第十七回交詢社大会欠席もやむなしと通知し、「今日は何分にも疲労致し、両宮参拜二見まで見物の勇氣無之、兎も角も半日計り休息不致ては不叶、加ふるに今日の天気も甚だ覺束なく、雨さへ降らねば道わるを犯して外宮丈けを済ましたく存居候事に御座候」(2048)といっているのはおもしろい。

伊東茂右衛門の回想に、明治二十八年一月二日、三島神社で「紙包の銭を賽銭箱に投げ入れ」ととき、先生が「宮寺といふものは世人の合力で立つて行くのだから」といったとある(伝三153)が、「済ました」という表現は、皇室の宗廟への敬意からはほどとおい印象だ。「幣帛料」だけではなく、会計報告には「金二十円」で「太々神楽奉納」というのもあるが(二一176)、これには三八や里の次男中村壮吉をよろこぼせようとかんがえがはたらいただろう。

もっとも、明治二十一年十一月十一日の一・捨帰国の宴にも太神楽がはいったと十三日の『時事新報』にあるから、『自伝』に「鳴物は甚だ好き」(七229)という先生の趣味なのかもしれない。

慶応義塾大学部設置資金募集の際、明治二十三年七月十六日に天皇から千円がおくられたとき、先生は十九日附捨宛の手紙に、「是れより大学の募金も一層都合可宜」(1524)とよろこんだ。そもそもこの「下賜」自体、前年一月七日附中上川彦次郎宛の手紙によると、旧知の宮内省御料局長官肥田浜五郎を通じて獲得することがかんがえられたもので(1357)、やうに、明治二十三年七月十八日附中上川宛の手紙では、中上川から御料局長官品川弥二郎への話がきっかけとなり、時事新報社の「伊藤欽亮より山県へ談じて、頻に周旋」(1521)してうまくいったのだといっている。『文明論之概略』では「王室と人民との間に至密の交情あるに非ず」(四187)とした先生も、ここではその「交情」の存在を前提として「方便」としての天皇の利用価値をみとめているわけで、『時事』明治十五年三月六日社説にみえる前年十月『時事小言』の「献本」のこと(八18)なども、あるいは同様の解釈が可能かもしれない。

ところが、こういう功利的天皇観になじまない話を石河幹明がたてている。三田四国町にあった育種場内の競馬

場で天覧競馬のおこなわれるとき、先生は自宅の二階を閉鎖して人をいれなかった。「遠望ではあ」っても「かりそめにも見下すことは畏れ多い」(伝一586)というわけだ。<sup>2)</sup> 明治十五年の「帝室論稿成」(二〇42)と題した絶句にも、「生民誰是不王臣」とか「吾仰帝家万歳春」とかといっているし、明治三十三年五月九日、「功績渺から」ざるをもって天皇から五万円がおくられたとき、病後とて「所感」を石河に筆記させ十六日の『時事』に発表したおりの感無量ぶり(一六600)なども、あながち、自身の仕事にたとえ過少なりともせよ一応は公爵とおなじ正札がはられたことに対する「拜金宗」的激情の流露とばかりはいえないだろう。もっとも、「此御沙汰の難有きは単に金額の多少に在らず」(一六606)とことわっているところをみれば、多少はその気もあつただろうが。

しかし、『文明論之概略』の判断は先生自身の内面を資料としてくださったものにちがいないのだが、それによって人民一般を類推するについてはあやまりがあつたとしても、「あるに非ず」とよみとられた先生の内面のありようがその後わづかのあいだに変化したとはかんがえにくい。とすれば、先生の天皇に対する敬意は芝居ということになる。清岡俊の回想によると、五万円について「有難い」(父論吉を語る138)という表現はあたらないうだし、おなじ清岡の回想に、「修身要領」を清書するについて先生は「帝室」の文字の位置に注意したが、これは「問題のおこらぬよう行の一番上に書く」ことにしたのでともある(同137)。平出ではなくて、そうみえるように「色々工夫して書い」たということなのだけれど、まえにふれた「献本」社説にみえる「天皇陛下」に対する闕字なども結局はおなじようなことなのだろう。

さて、二見ヶ浦でゆっくりあそんで、出発は二十六日になった。二十八日の『伊勢新聞』にしたがえば、宮川駅午前十時の汽車で四日市へむかうとき、「混雑に付き大工植木屋を中等に乗らしめたる代」として「一円六十五銭」が会計報告に記入されている(二一177)が、この旅行中、汽車賃は上等六人、上等半額二人、下等二人の構成となっていた。下等のふたりとは、すなわち、大工金杉大五郎と植木屋の親方とだった。明治三年十二月に神戸から横浜まで先生と

もにオレゴニアンを利用した朝吹英二の、「吾々と一緒に三等で少しも区別をされませぬでした」（我が福沢先生241）という回想がおもいだされる。

右の『伊勢』によると、二十六日は四日市昌栄館に一泊、二十七日午後一時十五分の汽車で名古屋にむけて出発、おなじ二十八日の『扶桑』によると、名古屋では秋琴楼にとまっている。二十八日笹島から二番列車で静岡へ、とあるのは予定だが、会計報告にはこの日久能山へのぼって「一元」（二一七）を奉納したことがみえている。『自伝』で否定されている「前朝の遺臣」（七三三）的心情がはたらいたのかどうか、先生は明治二十一年十月と明治二十三年十一月にも久能山へのぼっているが、家族旅行の最初も明治八年四月の日光だった。

会計報告（二一七）によれば、二十八日は静岡の大東館にとまって帰京は二十九日、たぶん静岡で、『時事』と一緒に『東京日日新聞』を買っているのが目をひく。先生は、二十二日にもたぶん浜松で『時事』を、また、二十八日にはたぶん名古屋で『大阪朝日新聞』と『大阪毎日新聞』とを買いもとめた。二十九日には山北で「すし二つ」、往路にも「山北駅すし二箱」というのがあるから口にあつたもののようにだが、先生の腹中におさまったという確証はない。

明治二十九年十一月六日、先生は長野大門町対旭館の一室にいた。一番列車で上野をたつて一旦対旭館に休息、善光寺参詣をすませて宿にもどつたのだ。同行は妻、一、里、三八、北川礼弼、小山完吾の六名、先生が予定をのぼして十一日に帰京するまでの詳細は『時事新報』の北川の随日記事にあきらかだが、『信濃毎日新聞』にも、その十一日附社説にいわゆる「老経済学者」の信州内における動静がよくあらわれる。そこには北川の筆にのらなかつた先生の口吻がしばしば息づいていて、この六日夕刻の先生をとらえた部分などもその好例だ。

翁曰く、明後日は東京に帰らねばならぬ用があるから暇があればよいが、コート、停車場から師範校まで、師範校

から城山館までは幾らあるか、ハ、一、停車場から七八町、夫から城山館まで七八町か、車で駆けて行けば雑作もあるまい、チャーシませう、明朝六時の汽車で直江津へ行き、三時の汽車で帰つて、汽車から直ぐに学校に行き、学校から城山館に行くとしませうと承諾の旨を告げて藤井氏を顧み、明朝は早いから何も不要、腹のへらない丈に握飯を拵えて下さい、握飯で沢山だ、と云ひ了つて羽田氏に向ひ私は間食は絶えて遣らぬから、酒は尚更ら菓子も食はぬ、何も用意して下さいな、只汽車で往復すると塵芥が附くから、顔と手を清める湯を用意して下さい、ソレ丈でよい、今もコレに（藤井氏を指す蓋し門下の生を見ること猶我児の如きよりコレと云ふ代名詞も口に上るなるべし）間食の好くないことを話して居つた処だと、翁の撰生上に注意する誠に深きを知るべし、併し間食を廢する代り、食事の間は短からず、一時間は通常のようにして当夜本社員の訪ふや将に晩食の始まらんとする時なりとの事なりしに付、刺を通ぜずして暫く差控えしに一時間はサテ措き殆んど二時間に垂んとせり。

「藤井氏」は榮四郎、「羽田氏」は師範学校の羽田定八、「本社員」はおそらく主筆水品平右衛門、ほかに北川が同席した。羽田は職員、生徒の希望を帯して、学校での演説を先生にたのみにきたというわけだ。羽田は水品とともに、翌日午後三時開会予定、長野城山館、会費一円の「福沢先生歓迎懇親会」発起人のうちにふくまれてもいた。

時間におわれた先生は、城山館のあつまりに「不断羽織とヘコ帯」とでのぞむはめになり、挨拶の冒頭でそのことにふれた。西郷隆盛が自藩の少年たちを慶応義塾にいれるについてわざわざ角帯を買いたたえた、と須田辰次郎が伝聞を回想している（我が福沢先生249）のは明治五、六年ころの話だが、門野幾之進の回想（直話174）にもある新銭座時代は無論のこと、塾生の角帯がそれほど知られていた意気軒昂の時代を先生はおもいだしただろうか。それはともかく、八日は越後の高田、九日は佐久野沢と、その後も先生はもとめに応じて歓迎会をこなした。ドサまわりに、ちょうど十年まえの興奮がよみがえつたようだった。

なお、先生の旅行は、日光、水戸などわづかの例外はあるものの、ほとんどが東海道、山陽道方面にかぎられていて、

石河幹明のいうとおり（伝三550）、山陰、四国に旅することはついになく、北陸も今回のまがりなりにもの経験が唯一のものとなった。結局三時間弱の滞在でしかなかったが、先生が直江津行きを当初から予定にくみこんでいたのは、保守性の殻をやぶって日本海をみておくことに執着したからかもしれない。

## 註

- (1) 明治二十六年五月十四日附神津国助宛の手紙に、「五、六日前箱根へ遊び」(1769)とあるが、何日のことか特定できない。先生の手紙を資料として同様の表現をなげめると、明治十四年十一月二十三日の「三、五日前」(9624)は十九日、明治十五年九月十六日の「兩三日前」(9678)は十三日、明治十六年五月二十四日の「三、四日前」(9740)は二十日、明治二十三年七月の「四、五年前」(1516)は二十年三月(1145)、明治二十三年十一月八日の「四、五日前」(1552)は五日(1555)といったところで、法則性はないようだ。ちなみに、明治十八年十月二十六日附に、「小生が江戸へ参りたるは、今を去る事二十八年」(9932)、また、明治二十四年二月二日附に、「二十二年前タイホイドを煩ひ、五月発病、六月床を離れ」(1581)とある。
- (2) 明治十七年ころの夏、先生は三田育種場初代場長池田謙蔵からブドウやオリブの話を書いている(9889)が、諸新聞によれば、「天覧」は十四年、十五年、十六年の、各六月、十二月におこなわれているから、このエピソードは、『時事小言』、『帝王論』の時期にみごとにかさなる。
- (3) ほぼ同時期の明六社で先生が「勤王ノ字面ハ戊辰以前ノ流行物」と発言した、と『朝野新聞』明治八年五月八日にある。『全集』二一、二九八ページ。

二〇〇七年の秋の雨の日、三太郎忌で福沢諭吉の話を書いていたと機会があって、しばらくわすれていた主題をおもいだした。お世話になった土田貞典氏と村上環さんにあつくお礼もうしあげる。